

2024年5月26日

説教題「わたしの平和を与える」ヨハネによる福音書 14 章 25～31 節

主任牧師 加藤 誠

「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」(ヨハネ福音書14章27節)

先週のペンテコステ礼拝で、インドのプリで貧困層の子どもたちの教育のために力を注いでこられたモハンティさんたちの証しに触れさせていただいたのは大きな恵みでした。約四十年前、若き日のモハンティ先生と小林洋一先生とがアメリカの神学校で出会い、お二人の友情を通して、何千キロも離れたインドと日本のクリスチャンが結びつけられ主の御名のための協働に招かれてきたわけですが、二千年前、聖霊の励ましを受けて家の扉を開けて世界に出ていった弟子たちの戦いの「豊かな実り」の一つに、私たちも与らせていただいているのだと思いました。

ただ、福音が「人から人へ」と伝えられていくプロセスは、けっして容易なものではなかったこと。そこには大変な戦いが伴ったことを今朝は覚えたいのです。

先週の日曜日、夕食を囲みながら、モハンティ先生のお父さんが信仰に導かれた話を伺いました。ヒンドゥー教徒の家庭に生まれたお父さんは、村にやってきたイギリスの宣教師から基督教のリーフレットを受け取ります。しばらく本棚の上に置きっぱなしにしていたのですが、どうしても気になってリーフレットを開き、はじめて聖書のイエス・キリストを知ります。もっと知りたいと、カルカッタの宣教団の住所に手紙を出しますと、聖書やテキストが送られてきて、さらにイエス・キリストの信仰を学ぶことができ、このキリストに従っていきたく心に決めるのですが、そのために家族や村の人々の厳しい迫害に遭うことになったそうです。時には毒入りの饅頭を渡されたそうです。それに気づいた人がそのことを教えてくれて死を免れたそうですが、その村にはもはやモハンティ先生のお父さんがいる場所はありませんでした。

その時、お父さんはどんな思いで家族や村をあとにされたのだろうか。その戦いと祈りを想像するとき、胸が苦しくなります。お父さんは息子たちに聖書の信仰を伝え、アメリカでの学びに送り出しました。そこにも簡単ではない戦いがあったことだろうと想像します。

主イエスを信じて歩むことは、主イエスがこの世界で直面された戦いに私たちも連なることを意味します。残念なことに、この世界では、神さまの正しさと愛が素直に受け取られていきません。主イエスがどれだけ心込めて祈り、一人ひとりに神さまの愛の福音を手渡していかれたか。しかし、そのところで、主イエスに対する憎しみが生まれ、嫉妬が向けられ、激しい反対が起こっていきました。主イエスの言葉や行動が悪意をもって捻じ曲げられ、偽りの証言をする人があらわれて、この世の権力によ

って主イエスの運動は葬られていきました。ペンテコステの前、部屋の中で祈る弟子たちが一番直面した闘いは、この世界にあふれる人間の悪意、神の愛と正しさに反抗していく罪の深さと、どう向かい合っていくのか…ということだったと想像します。

今朝開いたヨハネ 14 章は、十字架を前にして主イエスが愛をもって弟子たちに語られた言葉が記されていますが、ここ語られている三つのことに心を向けたいのです。

一つは、父なる神が主イエスの名によって遣わされる聖霊、弁護者（助け主）が、私たちにすべてのことを教え、主イエスが話したことをことごとく思い起こさせてくれる…ということです。教会は、主イエスの言葉を離れては何もできません。主イエスが語られた言葉を一人ひとりが大切に聴き直し、自分のものとしていくところに建てられいきます。今日、わたしの心には、主イエスの言葉が届けられているでしょうか。神さまに対して心閉ざしているわたしの心は、いつのまにか干からびてしまっていないでしょうか。聖霊の助けを求めましょう。頑なになったわたしの心を、やわらかにし、主イエスの言葉が語られた言葉を豊かに宿らせてください、と。

もう一つは、主イエスは十字架を通して、私たちに平和を残してくださった。世の支配者がどんなに力を振るっても、その主イエスの平和を奪い取ることはできない。なぜなら、この世は主イエスの「肉の命」を奪うことはできても、主イエスの「霊的な命」を奪うことはできないからです。主イエスが十字架を通して、私たちに遺された平和は、この世界のどんな権力にも、荒波にも揺らぐことがない。その平和によって教会は守られるのです。今日も世界中のあらゆる場所で、人々の命が脅かされ、平和が奪われています。私たちの目には、とても平和とは呼べない現実が拡がっています。けれども、この世界で一人だけ、平和を宣言して下さっている方がおられます。それは十字架の主です。十字架の主が、今日も悲しみの中にいる一人ひとりに伴い、「心騒がせるな。おびえるな。神の平和はあなたと共にある。あなたを守る」と宣言して下さっているのです。

そして三つ目、最後に「さあ、立て、ここから出かけよう」という言葉です。先週のペンテコステ礼拝では、教会の矢印は「外に向かう」ことを語らせていただきました。教会は聖霊の力によって建てられるのであって、私たち人間の力では建てることのできないこと。私たちは、扉を閉じて内にこもっている時には「教会」となりえず、扉を開けて外に出かけていくとき「教会」とされることを、聖書から聴きました。この時、主イエスと弟子たちの周りには敵意があふれていましたが、そのことを承知で主イエスは「ここから出かけよう」と弟子たちを励まされたのです。

今日、主イエスはわたしに「ここから、どこに出かけていこう」とわたしを招いておられるでしょうか。主イエスに従って「外に向かう」時、私たちは「主イエスの教会」とされることを覚えたいのです。